

「君死にたまふことなかれ」

与謝野晶子

「晶子詩篇全集」(一九二九年)より

(旅順の攻囲軍にある弟宗七を歎きて)

あゝ弟よ、君を泣く、  
君死にたまふことなかれ。  
末に生まれし君なれば  
親のなさは勝りしも、  
親は刃やいばをにぎらせて  
人を殺せと教へしや、  
人を殺して死ねよとて  
廿四にじふしまでを育てしや。

中略

ああ、弟よ、戦ひに  
君死にたまふことなかれ。  
過ぎにし秋を父君に  
おくれたまへる母君は、  
歎きのなかに、いたましく、  
我子を召され、家を守り、  
安しと聞ける大御代も  
母の白髪しらがは増さりゆく。

暖簾のれんのかげに伏して泣く

あえかに若き新妻を

君忘るるや、思へるや。

十月とつきも添とはで別れたる

少女をとめごころを思ひみよ。

この世ひとりの君ならで

ああまた誰を頼むべき。

君死にたまふことなかれ。

※今回は「晶子詩篇全集」に収められている課題文の表現で統一いたします。